開館時間の延長は効果があったか
～一地区図書館の事例研究～

田 井 郁久雄

Extending Library Hours: the Case of a Branch of Okayama Municipal Library, by TAI Kakuo.

開館時間の延長は効果があったか
～一地区図書館の事例研究～

田 井 郁久雄

岡山市立幸町図書館の開館時間を延長することにより、サービスの向上を図るとともに、利用者の利便性を向上させ、図書館の活動を拡大する効果が期待される。本研究では、開館時間の延長を事例に、岡山市立幸町図書館における利用状況の変化を解析し、開館時間の延長の効果を評価する。

はじめに

全国の公立図書館で開館時間を延長するケースが相次いでいる。1999年に『現代の図書館』では「図書館の開館時間を延長する」というテーマで特集を掲げているが、全国の動向を反映した特集と考えることができる。開館時間を延長する理由はさまざまなことがある。最終的な目的がサービスの向上にあるという。もとろくすべての図書館に共通しているものと予想される。現実の事情が種々変化している場合でも、少なくとも表向きの目的としては、サービスの向上を求めて開館時間を延長するのであろう。

では開館時間の延長によって、サービスは実際に向上しているだろうか。この結果については不明確であり、延長を実施した図書館からも、確信を持って報告されているわけではない。まず実態や統計の分析が必要だが、そのような例は少ない。次に何をもってサービスの向上と判断するか、共通の認識があるわけではない。統計上表せない要素を持ち出せば、主観的な評価がすべてになる。さらに開館時間延長にはコストがかかり、費用対効果で成果を判断しようとすれば、さまざまな条件を詳細に分析しなければならない。最終的にコストをかけるだけの効果があるのか、そのコストを別の条件の整備に振り向けた方がより大きな効果があるのではないか、という検討も必要である。前述の『現代の図書館』の特集の中に、現代の図書館編集委員会によるアンケート調査の分析があるが、効果についての回答は主観的な評価であり、実態の詳細な報告の裏付けがあるわけではない。

本稿は岡山市立幸町図書館における事例の分析をもとに、開館時間の延長がどれだけサービスの向上に役立っているのか、どのような問題があるのかを考察することを目的としている。

岡山市立幸町図書館の開館時間は、2000年4月から、火～金曜日の平日のみ2時間延長されて、10時～20時となった。土曜日と日曜日は延長なしで、10時～18時である。

それまでの開館時間は10時～18時で、木曜日のみ1時間ずつ11時～19時となっていた。

開館時間の変更の影響が統計数字のうえにどのように反映されるかを明確に把握することは難しいが、それは他のさまざまな要素も数字に影響するからである。年を経るほどに他の要素の影響は大きくなるだけに、変更後2年間とそれ以前との比較による利用統計の数字やサービス内容の変化は、できるだけ
け詳細に検討されるべきであろう。統計数値について、本稿では2000年4月から12月までの利用統計数値と、前年度の同じ時期の数値を比較した。
なお、開館時間の延長には、一般的に祝日開館など開館目的増加も含まれるが、本稿では寺町図書館の実例をとるとし、1日の開館時間の延長である夜間開館のための時間延長に考察の対象を限っている。

1．岡山市立図書館の開館時間変更の経緯

（1）岡山市立図書館の施設整備と利用の状況
岡山市立図書館の施設整備の状況は、2000年度現在、次の通りである。
中央図書館
地区図書館3館（寺町図書館、西大寺図書館、倉敷市立図書館）
分館2館（伊鳥図書館、足守図書館）

その後、3館に設置された図書コーナーと、4台の移動図書館でサービスを行っている。

利用の状況は、本稿未尾の（参考資料1）「岡山市立図書館の現状 1999年度」の通りである。

このうち、2つの分館はいずれも地元図書館のロビーに設置されたきわめて小規模の施設なので、以下の分析における各施設の数値の比較等は、小規模施設を除き、中央図書館と地区図書館3館に限ることとする。

（2）開館時間変更の経緯
岡山市立図書館の中央図書館と地区図書館の1996年度以降の開館時間の変遷は、表1の通りである。アンダーライン部分が変更箇所であり、1996年度の変更には1年間の試行期間も含まれている。

このうち、1996年6月の変更と、利用の状況等の

表1 開館時間変更の経緯

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>~1996.6</th>
<th>1996.7～2000.3</th>
<th>2000.4～</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>中央図書館</td>
<td>10時～18時 (木曜日のみ11時～19時)</td>
<td>10時～18時 (木曜日ののみ11時～19時)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>寺町図書館</td>
<td>10時～18時</td>
<td>10時～20時 (土曜日は10時～18時)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>西大寺図書館</td>
<td>10時～18時</td>
<td>10時～18時</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>倉敷市立図書館</td>
<td>10時～18時</td>
<td>10時～18時</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

(なお主休館日は、1996.5月以降は月曜日(西大寺は水曜日)及び第3日曜日、1996.6月以降は月曜日(西大寺は水曜日)及び第2日曜日、国民の祝日

表1 開館時間変更の経緯

田井：開館時間の延長は効果があったか結果については、別に筆者自身のレポートである。

なお、以下で開館時間の延長について分析し考察する場合、もとの開館時間が何時までかによって、サービス効果やその結果の評価は大きく異なる。岡山市立図書館では、18時までの開館は30年以上続いていて市民にも定着していた。開館時間の延長あるいは夜間開館とは、単に開館時間の延長を一律に対象にしているのではなく、18時以降の開館を想定している。

（3）開館時間変更（2000年4月）の理由と経緯
2000年4月の寺町図書館の開館時間の変更は、地区図書館である寺町図書館のみ平日2時間延長されたという点で、変則的な面があった。
中央図書館と寺町図書館はいずれも岡山市の中心地域に位置する図書館であり、1999年度の年間貸出冊数は各々約134万冊と103万冊で、どちらも100万冊を超えている。寺町図書館は繁華街や駅に近い中央部の地区図書館であり、中央図書館は中心市街地から少し離れた位置にある。他の2つの地区図書館は施設、資料、利用のすべての面で大きな差がある。
1996年から中央図書館と寺町図書館のみ木曜日の開館時間を夜間へ1時間ずらしたのも、地域的な理由と利用度の問題により2館のみに限られた。

2000年4月の変更が寺町図書館に限られたのは政治的な理由によるといってよい。

1999年2月に現職市長を彼を市長に当選した現市長は、選挙公約に中心市街地の活性化を掲げていた。そのひとつとして、寺町図書館と併設し複合施設をつくっている西川アイプラザの夜間開館について、選挙演説のなかで触れていた。図書館名はあったなかったことだが、複合施設として、選挙後に夜間開館が具体的な検討事項になったのである。中心市街地を少しでも賑やかにすることが直接の目的であり、そのために公共施設は夜間開館を、という発想から出発したものであり、図書館のサービス向上のためという理由はむしろ後から付け加えられたといったよい。木曜日の夜間の利用状況を分析しても、図書館サービスの観点から考えれば中央図書館の方がより夜間開館が求められる理由は大きかったが、寺町図書館だけが開館時間延長の対象になったのはこのためである。

当初、図書館ではあまり積極的には対応しなかった。市民からは特に強く夜間開館を求める声があつたわけではないし、夜間の利用が多いと予想される
表2 幸町図書館の開館時間数の増加（4月〜12月）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>1999年度</th>
<th>2000年度</th>
<th>1999年度に対する%</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>開館日数</td>
<td>203</td>
<td>205</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>うち土,日</td>
<td>66</td>
<td>65</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>うち火～金</td>
<td>137</td>
<td>140</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>開館時間数</td>
<td>1624</td>
<td>1920</td>
<td>118%</td>
</tr>
<tr>
<td>うち土,日</td>
<td>528</td>
<td>520</td>
<td>98%</td>
</tr>
<tr>
<td>うち火～金</td>
<td>1096</td>
<td>1400</td>
<td>128%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（2）利用状況の比較（中央図書館と3地区図書館）

表3 利用状況の比較（中央図書館と3地区図書館）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>2000年度</th>
<th>1999年度</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>中央図書館</td>
<td>4,133(99%)</td>
<td>18,430(107%)</td>
</tr>
<tr>
<td>幸町図書館</td>
<td>3,965(99%)</td>
<td>15,109(99%)</td>
</tr>
<tr>
<td>西大寺図書館</td>
<td>560(108%)</td>
<td>3,573(101%)</td>
</tr>
<tr>
<td>浦安総合公園図書館</td>
<td>122(85%)</td>
<td>5,114(100%)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）2000年と1999年の開館日数の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>1999年</th>
<th>2000年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>中央,幸町,浦安</td>
<td>203日</td>
<td>205日</td>
</tr>
<tr>
<td>西大寺</td>
<td>202日</td>
<td>206日</td>
</tr>
</tbody>
</table>
ただし、「館別の登録者」の数値には注釈が必要である。登録した者ので利用は全館共通とでもできる。ある館で登録すればその館の新規者としてカウントされ、継続者者とは、前年度までの全登録者である。今年度も登録した人であるが、新しい年度になって初めて貸出手続きをした館でカウントされるので、必ずしも正確にその後の館毎の利用の実態が反映されているわけではない。

参考として、1993年度以降の中央図書館と幸町図
書館の年間貸出冊数の推移を、表2にグラフで示した。幸町図書館の貸出冊数は1993年度に6％、1999年度に8％伸びているので、開館時間を延長した2000年度はこの2年よりも貸出の延びが小さいことになる。

（3）幸町図書館の月日別貸出冊数の比較と分析
（4月～12月）（表4）

幸町図書館の貸出冊数の傾向は全体で4％、1日平均で3％だった。
開館時間が変わっていない土・日曜日の利用は、実数で4％減少、1日平均で2％減少である。
開館時間を25％延長した火～金曜日の計では、実数で9％増、1日平均で6％増である。
平日の利用では、火曜日の利用の延びが1日平均で13％増。金曜日が11％増。水曜日は4％増だが、木曜日の貸出冊数は1日平均で5％減少した。
1時間平均の貸出冊数では、火曜日～金曜日の全体で15％減少した。火曜日が10％増、金曜日が11％減少、木曜日が4%減少している。

以下をまとめると、幸町図書館では開館時間を平日25％延長したが、火曜日と金曜日である程度の増加が見られたものの、木曜日はあまり利用増につながっていない。前年度までの開館時間をずらすことでよく利用され、後年度においても特徴が失われ、利用が激減した。開館時間に変化のない土曜日、日曜日の利用が減少した。

前述したように、幸町図書館の2000年度の貸出冊数の傾向は前年度、前々年度よりも小さい。開館時間の延長は、全体の利用を伸ばすことはできず、曜日間で利用者を動かすため、ある曜日の利用を伸ばした代わりに、別の曜日の利用を減少させた。

なお、曜日別の貸出冊数は、祝日や年末年前後の前後が何曜日に当たるかでかなり大きく変化することがあるので、参考のために調べた。2000年では祝日

| 表4 幸町図書館の月日別貸出冊数の比較と分析 |
| (4月～12月) | 2000年度 | 1999年度 |
| 時間別 | 1999年度 | 2000年度 | 1999年度に対する％ |
| 個人貸出冊数 | 767,060 | 797,933 | 104% |
| 1日平均 | 3,779 | 3,802 | 103% |
| 1時間平均 | 472 | 416 | 88% |
| 土曜日計 | 176,183 | 159,067 | 90% |
| 1日平均 | 4,762 | 4,545 | 95% |
| 日曜日計 | 123,661 | 131,177 | 106% |
| 1時間平均 | 4,264 | 4,373 | 103% |

| 貸出冊数の割合 |
| 土・日曜日計 | 39% | 36% |
| 火～金曜日 | 61% | 64% |

| 祝日別 | 1999年度 | 2000年度 |
| 火曜日計 | 128,533(33日) | 162,851(37日) |
| 1日平均 | 3,895 | 4,401 | 113% |
| 1時間平均 | 487 | 440 | 90% |
| 水曜日計 | 113,399(33日) | 128,795(36日) |
| 1日平均 | 3,453 | 3,578 | 104% |
| 1時間平均 | 432 | 358 | 83% |
| 木曜日計 | 118,904(34日) | 109,940(33日) |
| 1日平均 | 3,497 | 3,323 | 95% |
| 1時間平均 | 437 | 333 | 76% |
| 金曜日計 | 112,627(37日) | 115,065(34日) |
| 1日平均 | 3,044 | 3,384 | 111% |
| 1時間平均 | 380 | 338 | 89% |

| 祝日の翌日の曜日 |
| 1999年 | 金 | 木 | 水 | 木 | 火 | 木 | 水 | 金 | (日) |
| 2000年 | 日 | 土 | 金 | 土 | 日 | 金 | 土 | 金 | (木) |

※10月は館内整理時期の影響、12月のカッコ内は年末最後の開館日で

（注）曜日別の貸出冊数には団体貸出等の数も含まれているため、個人貸出冊数と数値が多少異なる。
図書館の日々が土曜日当たる日が多いにもかかわらず、土曜日の貸出が減少していることは、実際の数値以上に土曜・日曜日から平日へ、利用が移行しているためと予想される。
(4) 幸町図書館の時間帯別貸出冊数（特に18時以降の利用状況） (表5)
時間帯別貸出冊数はコンピュータで集計可能な数値であり、開館時間を延長した18時以降の利用の状況をつかむ上で基本的な数値である。しかし、時間帯による貸出冊数は必ずしも正確に利用の実態を反映しているわけではない。たとえば時間帯別貸出冊数と時間帯別入館者数は全く別の数値であり、大きな差があるが、役所内の報告や議会答弁などではしばしば説明抜きで使用される。

時間帯別払下げられた1990年においても、18時以降の貸出冊数は幸町図書館で1日の貸出冊数の2.9%、中央図書館で2000年度で3.6%もあった。開館時間は貸出が集中し、しばしば18時以降にすれ込む。これだけで相当の数値がカウントされる。18時直前にも、たいいていカウンターの前には行列ができる。開館時間が延長されれば、あわてることもないのでは、これらのの人たちは18時以降にゆっくり貸出手続きをすることになり、18時以降の貸出としてカウントされる。

開館時間延長後の18時以降の貸出の数値は18時で閉館していた利用できなかった人たちの利用を示しているかのようにしばしば誇張されるが、実態はそうではない。開館時間の延長によってはじめて生じた18時以降の貸出冊数を実態に即して把握しようとすれば、この点が考慮されなければならない。

同じ意味で、19時以降の貸出冊数には19時以前に入館した人の貸出が多く、たとえば19時が閉館時間であれば貸出可能な人たちの数値が相当の割合で含まれていると推定される。

時間延長をしていない1999年度との時間帯別貸出冊数の比較の数値は、土曜・日曜を含む数値しか拾えない。土曜・日曜も含めると、全体的には4%増だが、18時まで時間帯では、朝の10時〜11時以外ではすべての時間帯で数値が減少している。特に17時〜18時の減少は大きいが、これは上記の通り、開館時間が延長されたために前年度の18時までの貸出が18時以降にずれ込んだためと考えられる。

いままで、貸出冊数は毎年伸びて来たが、98〜99年度の時間帯別貸出冊数の増減を見ると、両年度ともすべての時間帯で貸出冊数が増えている。2000年度は18時以降の利用が生じた代わりに、昼の時間帯は11時以降ですでに減少しているので（10〜11時は木曜日も10時閉館になったため、開館時間自体が1時間増えている）。

18時以降の利用がある程度ある程度の数値が増え、18時までの利用が減少しているということは、いままで18時までに図書館へ来ていた人の図書館利用がそのまま18時以降に動いたことを意味する。つまり、開館時間延長によって新たな利用者が増えたのではなくて、いままでの利用者がより幅広い時間帯で便利に利用できるようになったというメリットに止まっていることを意味する。幸町図書館の登録者数が昨年度よりも逆に減少しているのでも、開館時間延長によって新たな利用者が増加したのではないという事実を裏付けている。

<table>
<thead>
<tr>
<th>貸出冊数 (団体等を含む)</th>
<th>514,720</th>
<th>1 日全体に対応の割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>18時〜19時</td>
<td>47,318〜8,226</td>
<td>6.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>19時〜</td>
<td>35,923〜505</td>
<td>(時間的には10%)</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注)1999年度の土曜・日曜の貸出冊数の割合は39對61であり、この年度の18時以降の貸出冊数の39％分は土・日曜日の18時以降の貸出冊数と推定される。2000年度の土曜・日曜の貸出冊数は前年度とは同じであり、したがって、2000年度の18時以降の貸出冊数から前年度の土曜・日曜の18時以降の貸出冊数を引くことにより、平均の18時以降の貸出冊数を推計した。

<table>
<thead>
<tr>
<th>10時〜18時の時間帯別貸出冊数の増減 (1999年度に対する2000年度の割合)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>111% 98% 95% 99% 96% 95% 96% 91%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

60
（5）幸町図書館の18時以降の年代別貸出人数の割合等（表6）

年代別の利用状況を見ると、1日中のうち18時以降に幸町図書館を利用する割合がもっとも大きい層は19〜40歳である。貸出冊数で14.3％が18時以降となっている。

小学校以下の18時以降の利用は非常に少ない。

61歳以上の高齢者の18時以降の利用も、非常に少ない。

時間帯別に18時以降の貸出の割合を見ると、19〜40歳が飛び抜けて多く、次いで41〜60歳である。1日全体の割合と比較すると、19〜40歳だけが18時以降の利用が割合が大きく、あとはすべて割合が小さくなっている。18時以降はもっとも19〜40歳が利用する時間帯であり、特に小学生と高齢者にとっては幸町図書館の夜間開館はほとんどメリットがない。

子どもやお年寄りにとっては、夜間開館よりも身近に図書館があることの方が、はるかに大切なのである。

また、1日全体の年代別の貸出人数の割合を前年度、前々年度と比較すると、2000年度の方が19〜40歳、あるいは41〜60歳の貸出人数の割合が目立って大きくなったりはしていない。つまり、この年代だけを見ても、前年度の18時までの利用者が18時以降に拡散しただけなのである。

（6）入館者数

幸町図書館ではセンサーにより入館者の数字をカウントしているが、この数字は複合施設である建物の構造上、図書館だけでカウントできず、きめて不正確である。

センターは1階入口に取り付けられている。この入口から入館する人は、1〜3階の幸町図書館の利用者プラス4階と5階の西川アイプラザの利用者である。幸町図書館の入館者のみをカウントすることはできない。

さらに地下駐車場から階段やエレベーターで入館する人はカウントすることができない。ここからも1階から5階まで全館の利用者が入館している。

センターは別には入館と退館のたびに感知し、その計の2分の1を入館者数としている。したがって、その方法で1日全体の入館者数をカウントしているので、開館途中までの入館者数のカウントは不可能である。たとえば18時以降、閉館までのセンターのカウント数は18時までにすでに入館している人の2分の1の数が含まれる。

1996年から1997年にかけて、木曜日の開館時間を11時〜19時に変更試行したときに正確な調査を行っている。18時〜19時までの入館者について、実際に数器で入館者を数え、センサーの数字の割合及び貸出冊数の割合を比較した。その結果では、実際の入館者数の割合はセンターの半分以下、貸出冊数の割合の約3分の1がそれ以下であった。

9月の平日のセンサーによる入館者数の1日平均は次のとおりである。

1日全体の入館者数 1,841人
うち18時〜19時 224人（12.2%）
19時〜 77人（4.2%）

この結果によって、1996年、1997年の調査をもとに実際の入館者数を推定すると、平日のみの数字で、18時以降の実際の入館者数14.5％（約100人）から多くて8％（約150人）、うち19時以降は2％

表6 幸町図書館の18時以降の年代別貸出人数の割合等

<table>
<thead>
<tr>
<th>（1）1日全体に対する時間帯別年代別貸出人数の割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>~6歳</td>
</tr>
<tr>
<td>~12</td>
</tr>
<tr>
<td>~18</td>
</tr>
<tr>
<td>~40</td>
</tr>
<tr>
<td>~60</td>
</tr>
<tr>
<td>61〜</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>（2）時間帯別入館者数全体の中での年代別入館者数の割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>~6歳</td>
</tr>
<tr>
<td>~12</td>
</tr>
<tr>
<td>~18</td>
</tr>
<tr>
<td>~40</td>
</tr>
<tr>
<td>~60</td>
</tr>
<tr>
<td>61〜</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>（3）年代別貸出人数全体のうちの19〜40歳の割合の3年間の推移</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>年度</td>
</tr>
<tr>
<td>%</td>
</tr>
</tbody>
</table>
図書館界

（35人～40人）かそれ以下となる。
18時以降は時間数で20％なので、割合から考えれば19時までには少ないながらもある程度の入館があり、19時以降は非常に少ないということになる。
18時以降の貸出冊数の割合と入館者数の割合には、相当の差がある点に注意しなければならない。
なお、入館者数は講演における答弁やマスコミへの報道で、注釈なしに数字だけが使用される例が多い。市街には実態がわからないままに、行政にとって都合のよい使われたかがなされるのであってはならない。数値の内容の説明が必要である。

（7）月別の利用の特徴（表7）

開館時間延長は4月にスタートした。その結果が月を追ってどのように変化していったろうか。たとえば最初はそれほど市民に知れ渡していなかったが、月を追うごとに次第に定着していって、利用の伸びも大きくなっていっただろう。
1日平均貸出冊数の前年度比を見ると、4月から11％伸びているが、その後10月までは低迷し、むしろだんだん伸びが小さくなる傾向にあたる。11月と12月で回復の傾向が見られるが、実は12月は中央図書館や浦安総合公園図書館でも伸びが特に大きく、年末の曜日関係が利用の伸びにつながる原因にもなっているようである。

時間別の統計では、昼が長い春・夏に比べて早く夜がやってくる10月以降は、18時以降の利用の割合は減少している。トータルで11月、12月の前年度比の伸びがその前の4か月の伸びを上回っているのは、昼間の利用の伸びによるもので、夜間開館のためではない。

土曜日・日曜日の利用は、月を追って少しずつ平日へ動いている。土曜日・日曜日の利用は夜間開館の影響で減少しつつあると見ることもできるが、いまのところそれほど顕著な傾向とはいえない。

開館時間延長の結果は、すでに現在までの数値にある程度定着して表れていると考えることができる。

（8）サービス効果のまとめ

イ。幸町図書館の平日の開館時間は1日で25％、土曜日・日曜日を含めた4月から12月の総時間数で18％延長されたが、貸出冊数の伸びは4％（1日平均で3％）である。

時間当たりの貸出冊数では12％減少している。
このことは開館時間の延長によって貸出サービスの密度が薄まったことを意味する。
ロ。開館時間を延長していない中央図書館や他の地区図書館よりも貸出の伸びは小さい。

幸町図書館自体の前年度、前々年度の貸出の伸びよりも小さい。

幸町図書館は開館から平成11年度までは、中央図書館や他の地区図書館と同じく、おおむね利用は増加しており、特にここ2年間は年間貸出冊数が6％、8％と増加していた。開館時間に変化がなくても、ある程度の利用の増加は予想された。
大幅に時間延長をしたにもかかわらず、他館よりも貸出の伸びが小さく、幸町図書館自体の最近の2年間よりも利用の伸びが小さいという結果を考えると、開館時間を延長したことは利用の増加にはほとんど影響を与えていないどころか、むしろマイナス効果となり、サービス活動の活気を失わせる結果を招いている。

ハ、幸町図書館の新規登録者は前年度よりも減少している。さらに継続登録者も減少している。開館時間を延長したことで、新たな利用者が増開できたとはいえず、逆に減少している。中央図書館や他の地区図書館の登録者は増加または横ばい。

ニ、開館時間の延長の結果、前年度まで幸町図書館を利用していた利用者は、より長くなった時間帯でより便利に図書館が利用できるようになった。
18時以降の利用は、多くはいまだまでの利用者であり、同じ利用者が広がった時間帯へ拡散しただけだった。昼休みや17時以降、あるいは午後の時間帯に図書館へ来た人が、18時以降にやってきた、土曜日や来ていた人が平日の18時以降に来

表7 幸町図書館の1日平均貸出冊数の比較

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>4月</td>
<td>3,399</td>
<td>3,763（111％）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5月</td>
<td>3,781</td>
<td>3,901（103％）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6月</td>
<td>3,511</td>
<td>3,693（105％）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>7月</td>
<td>3,843</td>
<td>3,810（99％）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8月</td>
<td>3,918</td>
<td>3,947（101％）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>9月</td>
<td>3,977</td>
<td>4,005（101％）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10月</td>
<td>4,257</td>
<td>4,139（97％）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11月</td>
<td>3,808</td>
<td>3,929（103％）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12月</td>
<td>3,696</td>
<td>3,933（106％）</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
18時以降の開館は子どもや高齢者にはほとんどメリットがない。中学生・高校生の年代についても、少なくとも貸出の割合は小さい。

219歳から40歳の年代が夜間の中心的な利用者である。しかし、この年代の利用が前年度よりも目立って増えているわけではない。やはり、もともと利用者が幅広い時間帯へ拡散した。

21前年度まで、利用は緩やかといえば、着実に伸びていた。図書館を利用する人の範囲は、幸町図書館においては開館時間の延長に左右されず、いままでも他の要素によって広げられていた。

21開館時間は利用をすさまじく後要因のひとつかもしれないが、幸町図書館において、むしろ逆に利用を伸ばす上でマイナス要因として働いた。

開館時間延長の効果は各図書館の条件によって異なることは当然だが、全国の実例をいくつか調べた範囲では、幸町図書館の結果に見られる傾向は、数値の程度の違いはあるとしても、おそらく相当多くの部分で、開館時間を延長した他の図書館にも共通しているのではないかと推定される。

2000年11月に地元の新聞が、幸町図書館の開館時間の延長を取り上げている。利用者は好評だが、利用はあまり増えていないとして、PR不足が原因という図書館側のコメントを紹介している。

実際の原因はPR不足ではない。よりPRするに越したことではないが、開館時間延長についてのひと通り考えられただけのPRはすでにしている。少なくとも中央図書館や前年度までの幸町図書館よりはるかに多くのPRの機会を得ている。それでいて、中央図書館やいまだ幸町図書館よりも利用の伸びが小さいとすれば、その原因がPRでないことは明らかであろう。

18時以降の利用は確かにまだ十分ではないが、それでもある程度は利用されている。問題はその分、他の時間帯の利用が減少していることである。18時以降利用しても、昼の時間帯から利用が動いただけであり、総体としての利用が伸びていないことが問題なのである。利用の拡散がサービスの密度を薄めることが結局図書館の魅力の低下につながってゆく。開館時間の延長が利用を伸ばす要因なら、18時以降の利用は相当な利用増として数値に反映されていなければならないが、幸町図書館においては、利用を伸ばす主要な要因は開館時間の延長ではなかった。開館時間は利用を伸ばすさまざまな方策のひとつかもしれないが、効果の薄い方策であり、資料内容や職員によるサービス内容の充実の方がはるかに重要な要素だったかもしれないのである。

さらにそれ以上に、いままで伸ばしていた利用が、なぜ開館時間の延長によって、逆に鈍ってしまったのかが問題なのである。延長という方策自体にサービスの密度を、つまりはサービスの魅力を薄める要素があることに気が付かなければならず。PR不足などに原因を求めるとは、本質から目をそらす言い訳になりかねない。

3．図書館サービスの向上・拡大のための方策——そのひとつとしての開館時間延長

（１）図書館サービスの向上・拡大のための方策

図書館サービスの向上の結果は、量的な面と質的な面の両面で検討されなければならない。公立図書館のもっとも基本的な機能は資料提供であり、資料提供は貸出とレファレンスサービスで成り立っている。サービス向上の結果は、量的には貸出冊数の伸びやレファレンスサービスの活発化によって表れると考えることができる。質的な面は統計では計りにくいが、たとえば貸出される資料内容やレファレンスサービスの内容的な拡がり、利用者の層の拡がりと考えることができる。

ではどのような方策がこのような図書館サービスの向上をもたらすのだろうか。それはたとえば次のようなものである。

イ．身近に図書館があって市民のだれもが気軽に利用できるよう、地区図書館・分館等による全域サービス網を整備する。

ロ．資料費の増加、適切な資料選択により、資料内容の充実を図る。

ハ．サービス内容の改善や充実に取り組む。たとえば読書案内やレファレンスサービスの重視、親切

63
図書館界

で適切なカウンターサービス、児童サービス・高齢者や身体障害者のサービスの充実など。
二、職員の専門的耐性や意欲の向上は、電子の前提
でもある。
ホ、開館時間延長や開館日の増加により、利用しやすい条件を設定する。

以上のような方策がどのように図書館サービスの量的・質的な充実につながるのだろうか。
何がもっとも重要な要素なのか、いま何に重点を
置くことがもっとも大きなサービス向上につながる
のかは、それぞれの図書館によって異なる。ある要素
が進んでいても、別の点が遅れていれば、かえって
無駄が生じることもある。図書館数が多くても、
各家の施設が小規模で貧弱であれば、住民に失望感
を与えるだけである。長時間開館していても、資料
やサービス内容に魅力が無ければ、利用者はやって
こない。サービス向上のために、いま現在何に重点
を置かなければならないう、各図書館が選び取ら
なければならない。

開館時間の延長は、図書館サービス向上のさまざまな方策のひとつにすぎない。他の方策が優先され
た方が大きなサービスの向上をもたらすかもしれないのである。

一般的にはイ・ニ直接図書館サービスの向上・
拡大につながるのに対して、開館時間の延長がサー
ビスの向上につながるかどうかは不確かな部分が多く、逆にサービスの後退につながるマイナス要因と
して働くこともある点に注意しなければならない。
図書館サービスの量の動きについては貸出冊数や
貸出登録者数、入館者数などで判断することができ
るが、質的な充実度については数字では計りにくい。

そのうえでも蔵書の充実度についてはある程度数
字にも表れ、目にも見える要素である。

図書館の魅力は何か、読みたい本があるかどうか、
読みたいが読めるかどうかにかかっている。
十分な資料費、適切な資料の選択、魅力のあるディ
スプレイ、予約すれば必ず、そして速く応えてくれる
サービス体制などが求められているのであ。資料
費は予算の問題であり、そのほかは職員の能力や
意欲、つまりは職員の質の問題、職員の専門性にか
かっているといえる。

読書案内やレファレンスサービスの充実は図書館
サービスの基本だが、数字だけに表しにくい内容であ
るだけに、サービスの質の向上として市民にも行政
にもなかなか理解されにくい。実際には読書案内や
レファレンスサービスに限らず、市民に直接接する
カウンターサービス全体がサービスの質に係わって
いるのであり、読書案内やレファレンスサービスは
直接的に職員の専門性が利用者に対して目に見える
形で表面化するのであって、専門性の内容はさらに
幅広い範囲に隠れている。しかし、これサービス
の質の向上は、行きつくところ職員の質の問題、専
門性の問題である。

開館時間の延長は資料費の問題にも職員の専門性
の問題にも影響する。

開館時間の延長のために必要とされた経費と資料
費とは、表立っては直接関係はないもののとされるが、
実際には、一方の経費が増える以上は他方にも影響
する。本来は、開館時間を延長して利用を増加させ
ようすれば、それに伴って資料費も増やさなければならないと考えるのが図書館の内部では自然なここと
だが、行政内部の意識ではむしろ逆である。一方で
経費が増えたのだから、他方は我慢すると考える。
実際に開館時間の延長に伴って資料費も増加するケー
スはあまり聞きないし、逆に減少する例はある。
前述の『現代の図書館』のアンケート結果でも、開
館時間延長に伴って資料費が増加した図書館はわず
かしかないという結果が出ている。その意味では、
どこに予算の重点をおいてサービスを向上させるかは、図書館として選び取らなければならない。資料
の充実がサービス向上のためにもっとも重要なことだと考えると、資料費の増加に予算の重点を置か
なければならない。資料負荷を充実させた場合と開
館時間を延長させた場合のどちらかが図書館の利用を
伸ばすのかは、本来は行政の内部で厳しく問うべき
問題なのである。

職員の質の問題は、図書館の外部にはもっともわかりにくく、図書館の内部ではもっとも切実な問題
である。現在の財政状況では、開館時間の延長に伴って専門職員の増員が得られる例は少ない。非専門
職員や非常勤職員、パート職員やアルバイトの増加
はサービスの質に直接影響する。職員数や専門職員
の数で相当のゆとりがある図書館とはもとよりして、
もともと職員にゆとりのない図書館では、非専門職
員や非常勤職員の増加はサービス内容に直接影響す
る。時間差勤務により、カウンターに立つ専門職員
の数が減少したり、あるいは職員相互の連絡や意見・
知識の交換が薄くなれば、いつのまにか目に見えない形でサービスの質が落ちてゆく。このような図書館では最初はやむを得ずこのような体制を受け入れて業務を続けるうちに、いつのまにか職員体制にサービス内容を適したものに少しずつサービス内容が薄くなってしまっている。日常の続いた経過の中で、明確には意識しにくいものである。以前から勤めていた職員は、職員間の活気がなくなり、サービス内容が薄くなって充実感が失われたような気がするかもしれないが、とりたてて問題がなければ、「これが当たり前の」となる。サービスの質の向上は、図書館全体、職員全員で常に意識的に意識的・意欲的に取り組んでゆかなければ達成できるものではないが、職員体制を無理でむしらず、まずそれに合わせて毎日を切り抜けてゆくことが優先してしまうもののである。

サービスの質が低下すれば、目に入らない形でサービスの量にも影響してくる。サービス内容に失望した利用者はいつの間にか図書館から離れてゆく。読書案内やレビューノスサービスが行き届き、予約サービスが充実した図書館では貸出が伸びて、逆になれば利用が減少するの当然である。開館時間を延長したにもかかわらず、それに伴って貸出冊数が伸びないときは、その原因のひとつとして、いつの間にか進行するサービスの質的な低下の影響を考えてみなければならない。

ここでも、図書館サービス向上のためには何を選択するかということが問題となる。以前、開館時間の延長は住民が求められるサービス向上であり、そのためには自動貸出機やアルバイトを入ってても対応すべきだという主張が、図書館問題研究会委員長によってなされたことがある。開館時間の延長という方策が、職員体制の充実というサービス向上のための他の方策と逆反し、逆にサービス低下的招きを招く場合もあることを、現実の観察の問題として厳しく意識することは、なかなかできないものなのである。

（2）開館時間延長が生かされる図書館の位置と環境

図書館が成功する条件のひとつは、図書館の位置や環境である。夕方から夜にかけて人が集まりやすいテナントの近くは、図書館の夜間開館にもっとも適した位置といえよう。車で通勤する人にとっては、幹線道路沿いに帰りに立ち寄りやすい場所である。また、大型の団地や住宅地の中の図書館であれば、夜間に家族連れで利用することもできよう。しかし、多くの図書館はこのような理想的な位置に建てられているわけではない。

もうひとつの条件は、夜間に図書館を利用するようなライフスタイルが定着しているかどうかである。この点で、条件が異なる外国や大都市を持つ地域の成功例が、他の地域に当てはまるわけではない。また、コンビなどによる夜型的生活スタイルの進展が、直ちに図書館の夜間開館に結びつくとは限らない。夜間にゆっくりと図書館を利用する生活のスタイルが、現在とこれから日本の生活にふさわしいものかどうかは、もっと議論が必要である。

幸町図書館の位置は上記の理想的な場所ではない。しかし、夜間開館にまったく達しない位置というわけではない。一般的には、むしろ夜間に比較的利用しやすいと思われる位置としてよいくらいである。岡山駅からも繋がるからも歩いて10分くらいで、夜遅くまで開いている若者向けの大型ショップからも2、3分しかかからない。少なくとも、市中心市街地を少し外れていて、周囲に店もない中央図書館よりもはるかに夜間開館に適しているように思わせる。ところが実際には、1996年に木曜日の開館時間を中央図書館と幸町図書館の11時から19時までと変更した結果をみると、18時以降の利用の割合は明らかに中央図書館の方が多く、幸町図書館では効果に乏しかった。

中央図書館の場合は帰りに車で立ち寄るケースが多いと予想されるが、街中の幸町図書館は駐車帯数が少ない、車で立ち寄りやすい場所ではない。駅や繁華街近いといってもすぐ近くではないし、仕事の帰りに立ち寄ろうとすれば、近くの市民にとってはわずかずり道を変えなければ立ち寄れない。若者などに気のない店は幸町図書館よりも駅に近いため、そこからさらに図書館まで足を伸ばそうとすれば、実際の距離以上に遠いのである。

幸町図書館は市中心市街地に位置しているといっても、周辺の街は夜は暗い。幸町図書館が隣接している西川緑道公園は、昼は気持ちのよい散歩道だが、夜は暗くて散歩など楽しめる道ではない。緑道公園の向こうはいく分分から大隠居が広がって、図書館とは異質の雰囲気をつくる。図書館前の下石井公園は、夜はスケートパークを楽しむ若者が集まって、これも図書館とは異質の場となり、ホームレスも多い。
図書館界

幸町図書館周辺は、明るい日中には緑道公園と下石井公園が緑の多い快適な空間をつくり、昼休みの時間には弁当を広げ人も見られるような場所となる。近くのビジネス街から図書館へやってくる人も多いが、夜は帰りの通り道にもなりにくい。幸町図書館の周囲は昼の時間帯にこそ多くの市民でぎわい、活気が生まれる街などにある。

このような位置でなぜ図書館が街の活性化につながるのか、市の中心部においても十分検討されたとは思えない。少なくとも十分な検討を裏付けるような経済のゆく文書はない。夜の西川緑道公園を明るくするという計画づくりであり、市の上層部が打ち出した中心市街地の活性化という漠然とした大きな方向付けが、そのまま図書館の開館時間の延長につながったのが実態だったという。その場合、ほとんど無条件に好ましいこととして肯定されたのが公共施設の開館時間の延長の施策だったのである。

現実には開館時間の延長によって昼間の利用は減少した。つまり昼間は活性化とは逆に沈静化したのである。もっとと昼間こそ活気のある幸町図書館周辺は、少なくとも幸町図書館の利用に関しては、市民の夜間への多少の移動を引き替えに、昼間の活気が失われることになる。これが街の活性化になるのだろうか。

上記で指摘した夜間開館に最適の図書館の位置は望んでもなかなか得られるものではない。幸町図書館のような条件は総合的にも申しろ良い方なのである。それにもかかわらず夜間開館は成功したといえないとすれば、夜間開館は一般に期待されるほど大きなサービス向上にはつながらないのではないか、という疑問が生じる。そして実際に各地の図書館の夜間開館の実態を調べると、それほど大きな利用の増加にはつながっていない例の方が多いのである。

（3）地区図書館整備と開館時間の延長の選択

幸町図書館の開館時間延長に至る経緯については、前述したとおりである。岡山市ではもともとは地区図書館の整備計画が優先していたが、政治的な理由によって開館時間延長に重点が移った。

市長は1999年9月の議会において、開館時間延長よりも地区図書館整備を重視すべきではないかという質問に対する答弁で、開館時間の延長も地区図書館もどちらも重要だと答えている。同じように重要なので、すぐに実行できる方を優先したいと考えることもできるが、現実には、建設直前だった基幹地区図書館建設は凍結されたまま2年が過ぎてしまった。

地区図書館整備の必要性については、自治体によって条件が異なる。岡山市の状況を詳細に説明することは本稿の範囲外であるが、ここでは（参考資料1）により岡山市の図書館の整備と利用の状況を示した上で、人口約62万人、市域が500㎢を越える岡山市においては、図書館サービス発展のもっとも重要な課題は地区図書館の整備であり、そのためにこそ図書館整備計画が策定されたことを指摘しておくと止めたい。

幸町図書館では、2000年度は職員3名増で貸出冊数は5万冊を超えることはないと予想される。西大寺、海部という地区図書館は、各々職員3名で年間貸出冊数が30万冊以上、分館の伊島図書館は嘱託司書2名で25万冊以上である。いまま岡山市立図書館は少人数で効率的なサービスを実現してきたが、開館時間の延長は少なくともサービスの量的な発展に職員を生かす方向ではない。

新規登録者が減少していることはすでに指摘してきただけの図書館や分館をつければ、その利用者数の多くは新規登録者であることによっている。岡山市の図書館は市町1人当たり6冊を越える年間貸出冊数を実現しながらも、1年間の貸出登録者は14%に止まっている。地域による利用に極端な偏りがある現状では、すでに図書館を利用している人たちはよりやすったり利用できるための開館時間の延長、図書館が利用したくもない地域の人たちが利用できるようになる図書館の建設では、比較するのもおほかしくに重要度が異なる。それにもかかわらず開館時間の延長に針が傾いたのは、この方が手軽に予算も人手もかけずに実現できるという恩恵のためであろう。実際には職員や他の経費をかけた一方で、利用はほとんど伸びなかったのである。

（4）職員体制

開館時間延長がサービスの後退につながる場合、行きつくところ職員問題に大きな要因となる。幸町図書館の職員体制は運輸車担当の用務員を除くと次のように変化した。

1998年度11名（正規司書9名、嘱託司書2名）
1999年度12名（正規司書9名、嘱託司書3名）
2000年度15名（正規司書9名、嘱託司書4名、主事1名、臨時職員1名）
1999年度の嘱託書1名の増加は、新たな地区図書館建設準備のための要員だったが、建設計画が中断しているため、2000年度にはさらに嘱託職員1名と非専門職の主事1名、臨時職員1名を増員して、平日2時間の開館時間延長に対応するという結果となった。

幸町図書館の年間貸出冊数は1998年度で約95.6万冊、1999年度では約103万冊である。職員1人当たりの貸出冊数は々々7.8万冊と8.6万冊であり、それでなくとも厳しい状況だった。産休代理の臨時職員に加えて、児童を抱える職員や病気がちの職員もいて、時間外勤務は必須の勤員に偏り、2時間の時間外勤務は当たり前という毎日が続いていた。そのうえに開館時間が20時まで延びれば、職員増に繋がる対応できない。正規専門職の増員は切実なお願いだったが、結果的には嘱託書と非専門職の主事の増員で対応することとなった。

非専門職の正規職員のカウンター配置は幸町図書館ではもちろんのこと、岡山市立図書館全体でも初めてのことだった。図書館専門職員は、岡山市の一般行政職員とは別に図書館専門職としての実験を受け、その成績として図書館に勤務している。庶務関係の職員と運転技師ー用務員という現業関係の職員は別で、本庁との定期的な異動の対象となる職員だが、専門職の業務を特に区別する非専門職員が担当すれば、専門職として試験を実施している意味が失われると。たとえば本庁では図書館専門職の試験に通ることができなかったけど、役所職員の試験を通って勤務している職員がいる。こういう資格を持った職員が希望により図書館で専門職と同じ仕事ができることになれば、なぜ図書館職員としての試験をってきたのかということになろう。非専門職であるにもはなって、その意味では、これまで長い間続けられてきた正規職の専門職制度が覆されるようしている兆しであり、図書館の職員制度のあり方が開館時間延長を機会に見直されようとしているのである。この点については職員労働組合にも十分な説明はなく、組合全体も交渉などの場でそれほど問題にはしなかったとされている。

職員体制の変化はすぐに目に見える結果となって現れるとは限らない。しかし、その影響は個々の職員の意識や思考を越えて年を追って落ち着いて、いつの間にか確実に大きかった専門職員によるサービスのあり方を変質させ、気が付いたときには取り返すことのできない状況をつくりだすことを予想しなければならないのである。

開館時間延長の側面には職員問題がある。非専門職員や非常勤職員、パートやアルバイトの増加などが無理関連してくることは避けられない結果と思わなければならない。これは幸町図書館に限らず、全国の図書館に共通した問題である。

（5）職員の勤務状況の変化

2時間の開館時間延長に対応するため、幸町図書館では早番、後番による交代制勤務をしているが、単純に2交代にしたのでは職員不足になるため、これに時間外勤務を組み合わせている。もともと前年度まで毎日のように2時間程度の恒常的な時間外勤務が続いていたので、いまの時間外勤務が昨日のまま残ることになり、これが特定の職員への偏り傾向が強くなった。何人かの職員はいままで以上に残業に追われる結果となっている。

交代制勤務は、もっともととるかのない職場において、たとえば利用が増えない場合でも職員の増員なしには実現できない。開館時間が変わらなければ、3%や4%の利用の増加はいままで当然のこととして、同じ職員数で対応できた。現に中央図書館や他の地区図書館は、幸町図書館以上の利用の増加に対して、職員数を変えない。1996年に中央図書館と幸町図書館の木曜日の夜間開館を実施したとき、開館時間をずらして、木曜日のみ11時間開館、19時開館として、同じ職員数で利用を伸ばしたのも、この点を考えた結果だった。

幸町図書館では2000年度の実質的な残業時間は昨年度よりも大幅に増加した。実質的な残業時間は、いままったく現在、岡山市立図書館の職員の実際の時間外勤務の50%以上がサービス残業だからである。4月から8月までの幸町図書館の実質時間外勤務時間は、昨年度比で約180%であり、9月以降は少し減少の傾向ということである。

利用は伸びていても、時間的に延長をしなければ、交代制のための職員の総対数が足りなくなったり、職員を増員した上に残業までが増加した。職員1人当たりの貸出冊数は相当減少した。しかし、果たしたというよりも、交代制の結果として職員の配置が非効率的になり、同時に特定の職員への負担が大幅に増えた。

以前は忙しくても集中的に利用者への応対を行い、開館後に集中的に内部処理業務を行うことで効率的

田井：開館時間の延長は効果があったか
図書館同士の調査を行っているが、いまの時点での調査結果は次の通りである。

1. 開館時間内における利用状況
   - 開館時間内における利用状況は、今年度と前年度に比べてほぼ同様の傾向を示している。特に、午前中の利用が減少傾向にあることから、サービスの質向上が求められていると考えられる。

2. 職員の役割
   - 職員の役割においても、今年度と前年度に比べて大きな変化は見られず、従来通りの業務を担っている。ただし、サービスの質向上を目指して、職員の役割をより重要視する傾向が見られる。

3. 開館時間延長の問題
   - 開館時間延長の問題については、前年度と同様に、職員同士の意見が分かれるものの、全体的に意見は一致している。ただし、延長時間の設定や休日における開館時間の設定についての意見が分かれる傾向にある。

4. 一般利用者との対応
   - 一般利用者との対応においても、今年度と前年度に比べて大きな変化は見られない。しかし、利用者の声を受けて改善策を講じる必要があると考えられる。

以上の調査結果から、今後の課題としては、サービスの質向上を図り、職員の役割を重要視すること、さらに、一般利用者との対応を改善することなどが挙げられる。
開館時間延長の結果、あまり目覚しい効果は見られないことが多いのに、アンケート調査の結果などにより、しばしば市民の要求は大きいと理解されている。

アンケート調査は国の行政機関や新聞社などが実施する全国規模のもとでも、自治体や図書館などが実施するものもある。ひとつの参考には違いないが、アンケートの結果はそのまま実態を表したものとはいえないことに注意すべきである。

谷岡一郎は「社会調査」のウソの中で、「世の中のいわゆる「社会調査」の過半数がゴミである」と指摘している。

どのような対象に対して、どのような条件のもとに、どのような設問の仕方をするかによって、アンケート調査の結果はどのようにても収まる。開館時間の延長をすべきかどうかを問えば、だれでも〇を付ける。他に選択肢がある場合でも、開館時間の延長自体にはだれも反対しないから、単純に比較の問題だけで〇を付ける人がいる。最初から結果を誘導するようなアンケートも少なくない。しかし、開館時間の延長をするほんとうに自分自身が図書館を利用するのは、無関者も関心される側にも想定されている。

はんとうに重視しなければならないのは、アンケート調査よりも、結果の分析である。少なくとも前例が数多くある場合には結果の詳細な分析と検討こそ大切である。

図書館が新たにつくられた場合は、優れた図書館であれば、予想を大きく上回る利用を招く例が多い。また、それまでほとんど図書館に関心がなかった人も、図書館ができることによって常連の利用者になったりするものである。事前の期待よりも実際の結果の方がはるかに上回る。一方で開館時間の延長は、アンケート調査などで期待の声が大きい割には結果に乏しい。

すでに現実に図書館を利用している人にとっては、利用する時間が広がることはそのままサービスの向上と思える。事前には図書館の利用者にアンケートを取り、だれも延長を歓迎する。しかし、すでに全県市域で図書館が利用できるような自治体ならともかくとして、ほとんどの場合は、現在の利用者が満足することよりも、いままで図書館に来ることがなかった人たちが利用することを期待して開館時間を延長する。ところが延長の結果、はじめて図書館を利用できるようになった人たちに思っただよりも少ないのが実態なのである。幸町図書館の場合がそうだったとも予想される。

幸町図書館では平日2時間延長しても、以前と利用者数が変化したわけではないし、新たな利用者が開拓できたわけではない。図書館を利用する人の範囲は18時まででお考えが限られていたのであり、20時まで延長しても同様の人たちが例年と同じように割合で入れ替わって利用したのに止まっている。

夜間開館では、何よりも「働く人たちが夜間でも利用できるために」という大義名分があった。働く人たちも、18時までに図書館を利用していたのであり、20時までの開館でより便利に思えたとしても、そうでなければ利用できなかったのでなかった。

たとえば、2週間に1回図書館に立ち寄るために、それまで図書館へ来なかった人が18時以降の時間を割る例は少ない。図書館の利用は時間的な条件より地理的な条件に左右されているのであり、18時までで図書館を利用する範囲は20時まで伸びてもあまり変わらなかったのである。

最初に記したように、幸町図書館ではもともと市民から開館時間延長を求める強い声があったわけでははない。しかし、上層部からの方針が打ち出されるたび、図書館に関わるある市役所の職員からも、開館時間延長の方向を支持し、図書館職員に対して積極的な対応を求めめる声が出るようになった。

「18時まででは自分たちも利用できなかった。20時まで伸びれば利用できるようになる。そう言っていむ人は周囲にも大勢いる。」

開館時間延長の効果に疑問をとえる図書館職員に対して、繰り返しそう主張する人もいた。しかし、実際に開館時間の延長がなされた後、その人たちが図書館の頻繁に利用者になった様子はない。前述したように新たな利用者はそれほど増えていないのである。

市役所と図書館の距離は1キロもある。歩いても10分程度、ましてや自転車を使えば昼休みにでも十分本を借りにこられる距離である。2週間に1度、残業をしない日を設けても、18時まででも本を借りることはできる。幸町図書館の年間貸出冊数は10万冊を超え、家族連れや子どもの利用は中央図書館よりも少ないことを考えれば、働く人たちで幸町図書館を利用している人たちにとっては、1キロ以内の
図書館

範囲は非常に近い距離といってよい。そのような恵まれた条件のもとでも利用していない人は、夜間開館してもあまり利用しない人なのである。ところがそのような人たちでも、開館時間が延長されるまでには、改めて問われれば、自分たちが図書館を利用しないのは開館時間が早すぎるためだと思う。これは「なぜ図書館を利用しないのか」という理由を、利用しようとする自己自身の側ではなく、外部の理由にすり替えようとする「言い訳の心理」が働いているためである。この「言い訳の心理」が、一般的にも開館時間の延長を求める声になっている例は少ない。

さらに公共施設が長時間開館することを、ほとんど無条件に積極的な取り組みとしないことだとする先入観が、上記の心理を強化する。

開館時間延長の是非を問われては増え答えた多くの人が、自分自身では実際には利用しない。アンケート調査をするならば、いままで図書館を利用していなかった人に対して、開館時間を延長したら「あな
た自身を利用しますか」という問いをしなければ実態は反映されないだろう。そのうえさらに、その間に「はい」と答えた人すら、実際には利用しない人が多いのである。この点では新しく図書館が建設されると、以前は図書館にまったく関心のなかった人でも利用するようになるのと対照的である。

（7）行政による図書館政策と開館時間延長についての自己評価

1999年2月の市長交代直前までの岡山市立図書館の最大の課題は地区図書館の建設であった。1997年6月に策定された実施計画により、面を開架され3万冊を基幹図書館4館を建設することが決まって、その最初の地区図書館の土地が決定していた。99年の市町図書館の1名の職員数も、その地区図書館建設準備を予想した配置だった。98年度の図書館院議会において、委員から図書館の開
館時間延長について質問が出たとき、当時の教育次長は、開館時間を延長すればどうしても職員を増やさなければならない。いま職員を増やすとすれば、1名でも計画している地区図書館へ振り向けたと答えたのを、当時の職員だった筆者は覚えているが、おそらくそれはその後の本音であり、また正論でもあった。

しかし市長の交代によって、重点はたちまち図書館の開館時間延長に移ってしまった。図書館職員は図書館整備を最重点事項として求め、地区図書館を求める市民の声は断続的に何度か地元新聞の投稿欄に掲載されたが、行政を動かすほどの力にはならなかった。行政内部における政策の是非は、これほどまでに容易に変更される。

2000年6月の議会において、幸町図書館の開館時間延長は地域の活性化に役立っているかどうかという質問が出た。これに対して教育長は、まだ実施2か月であり、1年間の推移を見て評価されるべきだと思うたが、2000年度の4月と5月の1日平均の入館者数、貸出人数、貸出冊数の数値を示して比較をし、延長が増えているので、開館時間延長は中心市街地の活性化に確実に貢献していると考えている、と答えている。

4月よりも5月の方が1日平均の利用が多いのは1999年度も同じであり、2000年度に限られた状況でははない。開館時間を延長していない中央図書館でも同じであり、開館時間の延長とはなんの関わりもない。人を馬鹿にした答弁というべきである。比較をするならば前年度の同じ月に対し、開館時間延長に見合うだけの利用の伸びがあったかどうかを比べるのでなければならない。この数値は前述の通り中央図書館や他の地区図書館よりも伸びが小さいばかりか、月をまってさらにだんだん利用の伸びが減少してゆく傾向なのである。表7の通り、4月と5月の比較では特にこの傾向が明確なのである。答弁では意識的にその事実を隠そうとしたのである。あまりにも形骸化した議会のやりとりには、失望するほかない。

問題は、何も根拠がなくても、開館時間の延長が中心市街地の活性化に貢献していると答弁しようと
する行政の姿勢である。ここには事実をきちんと把握し、そのうえで図書館サービスのあり方を求める
とすると姿勢はまっとうに見られない。上が決めた方
向を、事実をねじ曲げてもひたすら肯定しようと
しているのであり、このような行政の姿勢をみた上で
図書館サービスの真の発展を妨げているのである。

4．夜間開館による開館時間延長の効果について

夜間開館による開館時間延長の効果については、
図書館の規模や位置等の条件により異なってくる。しかし、ある程度共通した条件を想定すれば、幸町図書館の事例は多くの図書館に共通した傾向を示すものと考えることができるのでは、以下にまとめた。
5. 開館時間延長の方法

開館時間を延長しても、開館に見合うだけの効果が得られない実例が多い。費用対効果の観点からも、効果が得られないなら本来は実施すべきではないが、それでもなお、一定の範囲の人たちにとっての開館時間延長のメリットを重視する場合は、費用や職員の負担、サービスの低下などを最小限とする試みが必要である。

その場合、常識的な方法は、開館時間延長の曜日を週に1回あるいは2回に限ることである。この方法で成果がないのに、毎日延長すれば成果が出るということはありえない。

延長のためのコストを最小限にして、夜間の利用を求める声にも応える方法として、岡山市中央図書館のように、たとえば週1回、開館時間を1時間ずらすのも一つの方法である。1995年度までの木曜日利用の状況を見ると、中央図書館においても、市民予想の利用状況を考えると、市民は前年度では週1回の19時まで開館する日を上手に生かしていたと考えることができる。朝の開館を1時間遅らせることで、マイナスの結果は見あたりず、同じ開館時間数と職員数で代客制勤務などもなしに実現できたことから判断すれば、効果があったと評価している。ただこの場合の主な目的は、利用の大幅な増加ではなくて、夜間も利用できれば便利だという市民の希望に週1回対応できたという点だということを間違いないようにしたい。欲張ってはならないのである。

20時までの開館には無駄が多い。実施している多くの図書館でも、19時を過ぎると、入館者は少なくなるという。実施する場合も、せめて曜日を制限する方がより有効的に活用されると予想される。

曜日を制限の場合、開館時間や閉館時間が曜日にやって異なることがわかりにくいという指摘もある。
6. 開館時間の延長、「良いこと」なのか

公共施設の開館時間の延長は、ほとんど無条件に「良いこと」と考えられがちである。たとえ目立った効果がない場合でも批判されることはない。その理由は、もっと言えば、便利になるからである。しかし、便利になることはほんとうに良いことだろうか。

市民の側からすればより便利になる、より便利なことは良くなることだということの思い込みがあっただけにわけは見当たらないのごのように思える。ただ、あまり利用が増えなくても、図書館を利用できる時間の範囲が広がること、住民にとって便利なことであり、サービスの向上になると考えるからである。これを職員の立場で反対をすれば、単に労働条件の強化として反対しているだけだと取られかない。サービスを受ける機会が時間的に増大することは市民にとっては好ましいことなのである。

しかし、まず第一に、ふつうのこのような場合には、費用対効果の問題は市民の立場では意識されにくい。

民間の商店であれば、夜遅くまで開店して利益につながることだろうが、かえって経費がかかり、利益が減少するのであればそうはしない。商店が夜遅くまで開店するとすれば、一般的に、場所や条件が適していて利益につながるかそうあるのである。

費用対効果の問題、職員体制の変化、サービスの質の問題は可能限り住民に明らかにされるべきである。このことは市民が開館時間延長を評価するための前提だが、実際には、正確な事実の公表自体、ほとんどなされていない。

市民個人個人の実感として、夜間に利用できるようになればそれだけ便利になったと感じるかもしれないが、全体としての効果の内容については、市民の立場ではつかみにくいし、実際につかめない。行政の側でさえ、行政効果の正確な把握にどこまでつとめていたか疑わしい。貸出冊数のように数字に表れる効果の分析は少なくともその気になればできるはずだが、きわめて表面的な形での報告に留まる例が多い。職員体制の変化によるサービスの質の変化ならば、数字以上に難しくて、市民にはもちろんである。行政にとっても把握できない。行政はほとんどの場合、自らの施策を肯定するし、把握できない結果については否定的評価をするものである。市民の評価が直接の気になることは、個々の感想という以上にはつかめるものではない。最終的には統計数字にも反映されてくるとしても、それには時間がかかる。サービスの質の問題は、詳細な数字の分析とともに、現場の職員が正確に実態を把握し、報告することが求められる。そのような例は少ない。マスコミの報道はしばしば市民も行政の評価と実態の差について、前述のように「便利になったという市民の声、しかも利用は伸びている」という矛盾した内容の記事で行政の顔を立てたりする。

人件費や施設管理費など、コストの増加についてはどこまで市民に対して公表されているだろうか。市民の目には、「開館時間の延長」という事実としてのサービス面を見ても、コストについては直接にはわからない。さらにそれも、いままでのサービス内容はそのままに時間だけで延長すると考えると、サービスの質が落ちても開館時間の延長の方が大切だと考えて評価をするのではないし、サービスの質を日常的な利用の中で明確に意識しているわけではない。図書館サービスに実際に満足したときにまた繰り返し図書館にやってくるのであり、失望したときに自然に足は遠のいてゆくのである。

コストの増加があるとすれば、開館時間の延長以外に、同じコストを充てることによる収益の充実や施設の改善、分館の完備など、さまざまな選択肢の中から、市民自身も選択することができてはじめて、市民が図書館にいま一番に求めていることが何かわからないのである。

費用対効果よりももっと基本的な問題として、長時間開館による便利さははんとうに良いことなのか,
市民生活のあり方が問われなければならず、筆者は考えている。

図書館はしばしば市民の「生活の豊かさ」をつくる施設として、そのあり方が議論される。「生活の豊かさ」は必ずしも「便利さ」によってつくりだされるものではない。いづれも利用できるという「便利さ」は、それにつきの施設の反面として、生活の内容を希薄にする。現在の社会の中では、豊かな時間と選ぶことより、充実感のない「便利さ」が求められがちだが、それがほんとうに生活の豊かさにつながることの必要である。

時間的な「ゆとり」は「生活の豊かさ」の基本的な要件のひとつである。

たとえば岡山市中央図書館や幸町図書館は、今回の開館時間延長前でも、すでに土曜・日曜も開館し、平日も18時まで開館し、木曜日には19時まで開館時間をずらしていた。すでに一定の対応をしている図書館に対して、さらに毎日のように夜遅くまで開館することが求められた。このような方向の前提に、そこで延長しなければ図書館が利用できないようなゆとりのない生活が想定されているとすれば、このような前提のうえに図書館なび一層の開館時間の延長を求めめる生活のあり方は、社会全体をますます忙しくし、ますます社会のゆとりを奪う。悪循環であり、どこかの時点で「便利なことは良いこともある」という問いが必要なのである。

夜間開館を主張する声の中に、「土曜日や日曜日は遊びに行きたいから図書館へ行かない。平日はいつも残業で利用できない」など図書館は夜遅くまで開館はほしい」という例があったという。

このような人はおそらく20時まで開館したところ図書館を利用することはだいたいその筆者は考える。前述した「言い訳の心理」とはこのような例をいうのである。それはとてもくとしても、夜遅くまで働き、休みには精一杯遊び、そのうえで夜遅く図書館へ行って本を借りて読書という忙しい生活を前提として、「だから公共施設も夜間開館して、市民の要求に応えなければならない」と考える方は、これから先どこまで生きて続けることができるのでしょうか。

視点を環境問題にまで広げるまでもなく、経済成長がすべてのような社会のあり方や価値観は、遠からず見直されなければならないだろう。そのとき図書館は、市民の生活のほんとうの意味での豊かさを体現した施設として、市民の生活に欠かせない役割を果たすことになる。市民が経済的な豊かさとは別の豊かさを求め、落ち着きとゆとりのある生活を実現しようとするととき、図書館はそのような社会の中で、量的にも質的にも充実した豊かなサービスを提供できる施設ならなければならない。具体的な問題として考えても、豊かなる図書館サービスを実現するためのもっとも大きな条件は職員体制である。開館時間延長の方向が職員体制の弱体化を進め、希薄なサービスを広げている現状は、充実感のあるサービスの提供をますます弱めている。

ただ長時間、いつもでも、便利に利用できるという条件は、ゆとりの中でひとりひとりの市民が豊かさを選び取るこれからの社会では、図書館サービスの充実にむしろ相関する条件にもなってくることを指摘し、幸町図書館の事例の検証のひとつであると。

（本稿は2001年3月の日本図書館研究会第42回研究大会における発表をもとに内容を追加したものであり、2000年12月までの岡山市立図書館の統計数値をもとに検証した。その後、最終稿までに2月までの主要な統計数値について確認したが、12月までとほぼ同じ傾向であったことを附記する。）

注
1）「特集 図書館の“開館”を問う」『現代の図書館』Vol. 37 No. 4 (1999), pp. 215-256
2）JLA 現代の図書館編集委員会 「公立図書館の開館時間延長・開館日数拡大に関するアンケートの分析」『現代の図書館』Vol. 37 No. 4 (1999), pp. 247-252
3）田井郁久雄 「いま大切なので開館時間の延長か」『みんなの図書館』1997.11, pp. 22-33
4）「山陽新聞」2000.11.18, p. 36
5）JLA 現代の図書館編集委員会、前掲論文 p. 248, p. 250
6）川端隆子「開館時間延長を積極的にしよう」『みんなの図書館』1997.3, p. 72
7）「岡山市議会会議録 平成11年9月定例」p. 57, p. 60
8）谷岡一部「社会調査のうつ」と『文春新書』文春春秋, 2000。p. 9
9）「岡山市議会会議録 平成12年6月定例」1999, p. 105
10）田井郁久雄、前掲論文, pp. 25-26
11）「山陽新聞」前掲記事
### AV資料数

<table>
<thead>
<tr>
<th>AV</th>
<th>CT</th>
<th>CD</th>
<th>VT</th>
<th>LD</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>資料数</td>
<td>4,535</td>
<td>13,986</td>
<td>8,995</td>
<td>730</td>
</tr>
</tbody>
</table>

関連図書館
- 中央図書館
- 幸町図書館
- 西大寺図書館
- 浦安図書館
- 伊勢戸図書館
- 資料費

### その他の項目

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>金額</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>岡山市日額</td>
<td>513,28㎢</td>
</tr>
<tr>
<td>人口（住民基本台帳）</td>
<td>617,662人（H12.3.31現在）</td>
</tr>
<tr>
<td>購入冊数</td>
<td>3,755,962冊（市民1人当たり6.1冊）</td>
</tr>
<tr>
<td>購入費</td>
<td>148,600,000円（市民1人当たり241円）</td>
</tr>
<tr>
<td>千円当たりの購入冊数</td>
<td>25冊</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 職員

<table>
<thead>
<tr>
<th>職員数（H11.4.1現在）</th>
<th>51人</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>内訳</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>中央30、幸町13、西大寺3、浦安3、伊勢戸2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>正規職員36（うち司法書士29）、嘱託司法書士11、臨時3、委託1、他施設職務を主とする兼務を除く。</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ほかに土曜日・日曜日および夏の学生アルバイト</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>職員1人当たりの貸出冊数73,646冊</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>正規職員1人当たりの貸出冊数104,332冊</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（「平成11年度 岡山市立図書館利用・蔵書統計」による）
参考資料2 中央図書館・幸町図書館年間貸出冊数の推移

図表に示すことで、中央図書館と幸町図書館の年間貸出冊数の推移を示しています。年次別に示されており、2000年度の予想値も示されています。